

同国二度の在外派遣経験より感じる中国の変化

前大連日本人学校 教頭

茨城県つくば市立谷田部小学校 教頭 青葉 正之

キーワード：中国の変容

1. はじめに

私は、平成2年～5年の間在外派遣教員として、中国上海市に赴任した経験がある。当時は、物資も充分揃わず生活することにも大変苦労したことを覚えている。

また今回、平成21年～平成24年の間在外派遣教頭として、同じ中国の大連市に赴任することが出来た。あれから20有余年が過ぎ、中国はどのように変わったのかとても興味がある赴任であった。

今回の赴任を機に、中国の生活・教育事情の変化等について紹介したいと思う。

2. 20有余年前の中国上海市の生活及び学校教育について

(1) 中国上海市の生活について

当時の中国上海市での生活は、いろいろな物資が揃わず、不自由な生活がしいられていた。とは言え自由市場に行けば、野菜や果物・魚や肉等、生活に必要な品は取りあえず揃えることができた。しかし、その品々の衛生状態は決して良い状態と言えるものではなかった。特に、肉や魚は流通の仕組みや保管の仕方が悪いためか、半ば腐りかけの品が並べられている状態であった。当時「新鮮な魚が食べたい」と、真剣に考えていたことを今でもよく覚えている。また、当時は、日本料理店も殆ど無く、本格的な日本料理を口にする機会は殆ど無い状態だった。

そのような中、赴任して生活を始め一番驚いたことは、商品を買いに百貨店の売り場に行ったときである。まず、欲しい品（店員のすぐそばに置いてある）を注文しても「ない」と言って売ろうとしない（売れても売れなくても、個人の利益にはならないため）。更に、お釣りは店員から投げて返される。もちろん、「いらっしゃいませ。ありがとうございます」などの挨拶は一切無かった。つまり、共産主義であり、資本主義的なサービス精神というものは、全くない状況であった。

更に、当時の中国の人々の生活に目を向けると、そこには決して裕福と言えるような状態は見られなかった。個人が所有する車やクーラーなどの贅沢品は殆ど無く、街を歩く人々の服装は、軍人服などの質素なものであった。また、道路には自転車があふれ、市民の足となっていた。総じて、一般市民の暮らしぶりは、貧富の差が非常に大きく、暮らし難いものであったと思われた。

(2) 中国上海市の学校訪問より

中国の学校訪問は、市の教育局から指定された学校にのみ訪問することができた。訪問で学校に到着すると、様々なアトラクションによる歓迎を受け、来賓を招待するという雰囲気ではあった。授業参観では、児童と教師の間問一答式の授業が続き、児童は常に背筋を真っ直ぐに伸ばし姿勢良く座り、質問には手を肘で直角に曲げ指先までぴんと伸ばした姿勢で待つなど、まるで軍隊の集団のような整然とした印象を感じた。一方児童の学用品を見ると、その当時の日本の品と比較して、粗末な品物を使用しているイメージが強かった。

先輩教師の話では、中国は国の恥となる部分については、決して他国の人々に見せないようにしており、外国人である私たちが訪問する学校は、特に選ばれた学校であり、そこにいる児童は優秀な子ども達であるということであった。また、その後の別の学校への訪問でも、自然な感じの交流はできなかった。

3. 現在の中国大連市の生活及び学校教育について

(1) 中国大連市の生活について

2度目の中国滞在となった大連市での生活は、以前の上海市での生活とはあまりにその様子が変わり、驚きの日々であった。まず、街には様々な物資が溢れ、日本と殆ど変わらない品揃えを持つスーパーが立ち並び、肉や魚もパック詰めされた新鮮な品が所狭しと並べられていた。また果物の種類もとても豊富で、季節に関係なく新鮮な品々が売られていた（大連市は港町であり、様々な地域から品々が集まるため）。また、日本の飲食店も数多く建ち並んでおり、日本の有名料理店・ラーメン屋さん等、本物の日本食をいつでも食べることができる環境であった。

また、中国の人々の生活に目を移すと、道路にはたくさんの外車（中国人の方々が所有）が走り、街を歩く人々は、まるでファッション雑誌から抜け出したような流行の衣服に身を包み、まさに自由を謳歌しているように見える。

更に、デパートや料理店では、サービス精神にあふれ、どの店でも満面の笑みを浮かべ迎えてくれた。そして、買い物の清算等も丁寧に対応してくれた。そこには、まさに成長し続ける中国経済の姿が象徴されているようにも見えた。

(2) 中国大連市の学校訪問より

① 授業参観の様子から

参観した学級には、47名の児童が在籍していた（1学級45名程度になるように編成しているそうである）。授業は、外国人教師と中国人教師のT.T.で英語の学習が進められていた。特徴的であったのは、黒板の上におかれたテレビ画面を通し、教材化された画像をもとに授業が展開されていた点である。コンピュータを活用したこの授業では、児童はテレビ画面の画像（絵）を見ながら、物の名前や動作を英語で答えたり、教師が提示するカードを見ながら、英語で答えたりする授業が進められていた。児童はとても意欲的で、身を乗り出しながら手を挙げる児童も見られた。更に、外国人教師の質問の意図が児童に伝わらない場面では、中国人教師が中国語で児童に補助説明をするなどの配慮をしていた。以前上海で参観した授業とは全く違い、児童の意欲を大切にされた授業が進められている点に驚いた。

② 教室環境・児童の持ち物について

教室に掲示してある主な掲示物は、目をよくするために全校で取り組んでいる体操を促す「目の体操の仕方」の掲示物と、児童の意識を高めるために掲示している「良い習慣は個々の自信に繋がる」の表示だけであった。目の体操については、授業始めに全校放送が流れ、放送に合わせて全児童が取り組んでいた。教室には、個々の児童が使用するロッカーはなく、児童の持ち物については、机の中か横に掛けられているショルダーバック（登下校の際児童が使用する袋）の中にしまわれていた。学習用具の他に、お弁当を持参する児童も見られた（お弁当がない児童は、学校で用意された給食を購入するそうである）。また学習用具としては、筆入れ（色々な機能がついていたり、キャラクターが描かれていたり、とても鮮やかな色遣いがされている）を持ってきているが、下敷きやノートは見られなかった。

③ 校内の掲示物や施設の安全対策等について

○廊下・階段等の掲示物

児童の作品等が掲示されているが、古い作品が多く汚れていたり破けていたりする物が多く見られた。各教室の廊下には、児童の作品等が掲示されているが、一部の児童の作品だけであり、学習の積み重ねがある作品等の掲示はなかった。また、各教科の学習の様子等を紹介したりするコーナーは見られなかった。

意図的な掲示により、児童の心を育てるような環境を意識した取り組みはなされていなかった。また、各教室には、日本のように、係りや当番活動を紹介するようなコーナーは見られなかった。

○施設・設備

一人ひとりの児童が、電子オルガンやコンピュータを活用して学習することができるように、音楽室・コンピュータ室などが常設されていた。トイレは、男女別に設置されており、洋式のトイレはなかった。水洗式のトイレではあるが、使用した後の紙は流さずに、便器脇に置いてある容器に入れるため（中国式）、トイレの周りに臭いがこもっていた。また、トイレ内は暗く、あまり綺麗な感じはしなかった。児童が飲む水は、校内数カ所に水のタンクが設置され、いつでも冷たい水や温かなお湯が使用できるようになっていた。

○安全対策

全校児童が1600名程度在籍しているため、比較的階段は広く作られていた。（しかし、在籍数の割には、廊下は狭く感じられた。）火事を想定して、各階段付近には消火器が設置されていた。また、「廊下は気をつけて歩く」などの、注意を喚起する表示も見られた。

④ 業間における児童の様子から

業間休みには、5・6年児童が校庭に集合し、各クラスごとに業間体育を実施していた。5・6年生が校庭に整列するだけで、校庭の隅々までいっぱいになっているので、1600名の児童が一斉に業間体育を実施することが出来ないであろうと思われた。教室内では、どのクラスにも数名の児童が残り、教室内の掃除をしていた（当番制になっている）。

⑤ 中国の小学校職員との話し合い

今回は、8名の教職員で大連市にある小学校を訪問し、授業を参観させていただいた。授業後には、授業を展開してくださった先生方と、授業の感想・授業に関する質問・日本の学校との授業の相違いについて、話し合いを行うなど、充実した時間を過ごすことができた。

4. おわりに

中国は、この20年あまりの中様々な分野で、とても大きな変化を遂げていると思われる。最も身近な部分の変化では、中国の人々の生活がとても豊になっていると感じる点である。それは、経済が成長し人民一人一人が裕福になったことと、流通や貿易が盛んになり、いつでもそして誰でも、世界中の品々を手に入れることができるようになったことである。また、社会保障が充実している点もこの国のすばらしさだと思う。

夕方になると、歩道や公園では、将棋やトランプやダンスや太極拳や楽器の演奏を楽しむおじいさんやあばあさんの姿が多くみられた。老後の生活が保障されている余裕と、人生を謳歌しているたくましさを感じた。そして、時折見せる満面の笑顔には、充実した日々の様子がうかがえる。

このように、同国二度派遣の滞在生活から見た中国は、着実に成熟しつつある人々の姿が感じられた。そして、在外生活中には、中国人の方々に、いろいろな形で大変お世話になった。今後も中国の方々にお世話になった感謝の気持ちを忘れず、生活していきたいと考える。

今回の大連での生活では、公共バスに乗る機会も多くあった。その中での出来事である。年配の婦人が乗り口に現れると、それまで座席に座っていた若い青年がスッと立ち、座席を譲っている。この行為は、別に特別な現象ではなく、別の場面でも同様な場面を数多く見かけた。大連では、年配の方や妊婦さんや年少の子どもなど、弱者を労る精神が、未だに生き続けており、誰もが当たり前に進められている行為なのである。日本でも、つい何十年前までは、よく見かける光景だったはずである。教育の大切さを改めて考えさせられた一場面であった。

今後の学校教育は、世界を視野に置き、弱者を労る心優しい気持ちを大切に考えるとともに、どのような場面に置いても、他人の言葉に耳を傾け、自分とは違った考えを持つ人々とも前向きに話し合い、共に実践していくことが出来るグローバルな力を備えた人間の育成が求められると思う。中国の今後に注視していきたい。